

文化財IPM コーディネータの育成

博物館・図書館のIPMは、これまでの薬剤を用いた駆除のように、殺虫・殺菌剤の専門家だけで実施するのではない。学芸員、司書、施設・設備に係わる職員や作業員、それらの業務を支援するボランティア、生物被害防除業務に携わる企業の技術者など、多くの人がそれぞれの立場でIPMの目的に沿って仕事を行うことによって、より良い保存環境が作られる。そのためには、資料に加害する虫やカビの種類・生態を知り、資料の保存環境を把握して被害が生じないよう維持し、もし被害が生じた時には早期発見、早期処置するための知識と技能が必要とされる。さらに多くの人が係わるのでIPMを実践する組織についての知識も欠かせない。

文献

- ※1 三浦定俊・佐野千絵・木川りか「文化財保存環境学」(朝倉書店、2004)
- ※2 吉川也志保「図書館における紙資料の実物保存」カレントアウェアネス、no.298、pp.21-26(2008)
- ※3 レイチェル・カーソン(青樹繁一訳)「沈黙の春」(新潮文庫、1974)pp.142-156

そのような知識と技能を持った人を育てるために、私の文化財虫害研究所では今年度「文化財IPMコーディネータ」の資格を創設した。この「文化財IPMコーディネータ」は上にあげたIPMに係わる分野についてすべての専門家であることを目指すものではなく、それらの概要と文化財IPM全体について正しい理解を持ち、必要な時には適切に各分野の専門家と相談しながら、文化財IPMを実施あるいは指導・助言して推進できる人を目指している。資格付与のための第1回講習会と試験を、今年12月15,16日に九州国立博物館で予定しているのも、もし関心を持たれた方は、文化財虫害研究所のホームページ (<http://www.bunchuken.or.jp/>) をご覧下さい。

図書館資料の生物被害と対策

博物館資料が美術工芸品から民俗資料、動植物標本まで幅広い分野にわたり、その材料も紙、木、布、その他の有機物・無機物など様々で、いろいろな種類の虫による被害を想定しなければならないのに対して、図書館における虫の被害は、シミ、ゴキブリ、シバンムシなどによる紙や装丁の食害、カツオブシムシによる羊皮紙などの食害、ゴキブリの糞による汚染などが代表的なものである。カビによる被害は本だけでなく書棚などにも見受けられる。ただし見つかる虫の種類が少ないと言っても、博物館に比べて図書館の生物被害対策が簡単というわけではない。施設内での虫発生原因は、1. 出入口や窓など開口部を通した外部からの侵入、2. 外部から持ち込まれる資料について侵入、3. 施設内のゴミからの発生のいずれかである。また外気が入るところは一般にカビの菌数が多い。さらに虫やカビが発生している場所は、湿度が高く空気がよどんでいたり、結露や雨漏り、漏水が起きていたりすることが多い。



書棚の目視点検

- ① シバンムシによる書籍の被害
- ② ゴキブリの卵鞘
- ③ ゴキブリによる書籍の被害
- ④ 本に発生したカビ

れはすでに病気になった材木だけを取り除き、ニレキクイムシが卵を産みつけた木までは伐り倒さなかったからである。また、伐り倒しても、春がくる前に焼いてしまわないと効果はない。…ニューヨークの昆虫学者は、経験からそれ(病気伝搬の原因)が何であるかを学んだのだ。ほかは無視して、ひたすらこの危険な原因を取り除こうと努力している内に、すばらしい成果が得られたばかりではなく、衛生環境改善に使った費用も、適当な幅におさめることができた。『沈黙の春』の中では、害虫を根絶しようとして強い殺虫剤を使うと、周辺の動植物や人間に悪影響を与えてしまうので、回り道のような方法でも害虫発生原因の一つ一つをいねいに除去していくことが、最も効果的で経済的な方法であるという、後のIPMにつながる著者の考えがくりかえし述べられている。農業分野におけるIPMは、1. 複数の防除法を合理的に統合して使用し、2. すべての農業害虫をゼロにしていることがわかりました。大学の構内には、死んだコマツグミ、死にそうなコマツグミの姿が見られたのだ。…1957年6月の末、いつもならば少なくとも370羽の雛が見られるはずなのに、たった1羽雛鳥がいただけだった。殺虫剤の散布によりこのような生態系の破壊が起きた一方、(ニューヨーク州では)かがやかしい勝利がおさめられている。…なぜまたニューヨーク州では、このようにすばらしい成果があがったのだろうか。衛生環境を厳しく改善したり、病気にかかった材木があると、すぐにほかへ移したり、焼却してしま—こういう方法にもつばらたよってきたのである。もっとも、はじめのうちははかばかしくなかった。だが、そ

あるIPM(総合的有害生物管理)も、preventive conservationとほぼ同じ頃に欧米を中心に始められた。IPMとpreventive conservationは直接に関連しているものではないが、背景にある考え方はよく似ている。どちらも全ての問題を一挙に解決する方法ではなく、科学的に最先端の手法を用いるものでもないが、地味で時間はかかっても「持続可能な」手法を用いるという点が共通している。IPMはもともと農業分野で、病害虫駆除のために殺虫剤に過度に依存していたことへの反省に立って生まれた。そのきっかけとなった本『沈黙の春』の中で、著者のレイチェル・カーソンはニレの木を枯らすオランダエルム病を伝搬するニレキクイムシの駆除について、次のように書いている^{※3}。“オランダエルム病防除の(殺虫剤の)スプレーは1954年(ミシガン州立)大学の構内からはじまった。…最初に小規模なスプレーがあった1954年は、べつに変わったこともなくすぎた。…でも、やがて何か狂っていることがわかりました。大学の構内には、死んだコマツグミ、死にそうなコマツグミの姿が見られたのだ。…1957年6月の末、いつもならば少なくとも370羽の雛が見られるはずなのに、たった1羽雛鳥がいただけだった。”殺虫剤の散布によりこのような生態系の破壊が起きた一方、(ニューヨーク州では)かがやかしい勝利がおさめられている。…なぜまたニューヨーク州では、このようにすばらしい成果があがったのだろうか。衛生環境を厳しく改善したり、病気にかかった材木があると、すぐにほかへ移したり、焼却してしま—こういう方法にもつばらたよってきたのである。もっとも、はじめのうちははかばかしくなかった。だが、そ

はじめに

30年ほど前から、博物館資料に対する保存の考え方は大きく変わってきた。すなわち博物館資料を展示・保存する際に重要な空調、照明、空気汚染、防災、防犯などの要素を、それまでは個別に考えてきたのに対して、1980年代頃からpreventive conservationと言う言葉でまとめるようになった^{※1}。これは単に個別の要素を、新しい言葉でひとくくりにしたと言うことではない。それまでconservation(保存)というと、資料に被害が生じた後に、修復を中心にして対策をとることをもっぱら指していたのを、資料に被害が生じないように環境を総合的に整えて被害を予防する方向へと、資料

保存の考え方が切り替わったことを示している。時期的には後になるが図書館資料の保存においても、90年代末に同じ方向へと変化した^{※2}。日本ではpreventive conservationは直訳して「予防保存」あるいは「予防的保存」と訳されることが多いが、その内容は資料を安全に保存するため、空調、照明、空気汚染、防災、防犯など保存環境を整えることなので、私は「保存環境づくり」と呼んだ方が言葉の意味をよく表していると考えている。

博物館・図書館におけるIPM

博物館資料の生物被害対策で



IPMから見た図書館資料の保存

公益財団法人 文化財虫害研究所

寄稿
三浦 定俊
 (公益財団法人文化財虫害研究所 理事長)